



親知らずのお話し

親知らずとは

「親知らず」と呼ばれる歯があります。この名前の由来は広く知られるところですが、20歳前後から生える場合が多く、親から独立する年頃(ごろ)で、親が知らないうちに生えてくる、または、昔は平均寿命が短く、親が亡くなってから生えてくると言った事のように。

また、欧米では「wisdom tooth(知歯)」=「知恵がつく頃に生える歯」という名前と呼ばれています。

「親知らず」は、正式には「第三大臼歯(きゅうし)」と言い、前から数えて8番目の歯です。親知らずは3歳頃から骨の中に芽ができればはじめ、12歳から16歳でエナメル質が完成しますが、人類では第3大臼歯の退化傾向が著しく約30%の人には親知らずがありません。

人間の歯は、この「親知らず」を加え、上下合わせて32本あります。しかし、今は28本の歯がきれいに咬(か)んでいれば、正常咬合(こうごう)としています。

現代人の歯と顎(あご)の大きさでは、7番目の歯(第二大臼歯)が生えるのが精一杯な場合が多いのです。ではこの場合、「親知らず」は一体どこへ行ったのでしょうか？

「悪者」時には「救世主」

先天的にこの歯がない人はいいいのですが、あるのに生えていないのは、骨や歯ぐきの中に埋まってしまっているのです。このような場合は少々厄介です。埋まっているところから、隣の歯を押ししてその歯にダメージを与えたり、近接する神経を圧迫し、痛みや痺(しび)れを引き起こしたりすることがあります。



また、完全に埋まってはいなくて一部分が顔を出している場合も、歯と歯ぐきの間に深い袋状の隙間(すきま)ができてしまい、そこに口の中の細菌が入り込んで、疲れていたり病気などで体の抵抗力が落ちた時に、腫れてやんだり、口が開かなくなることもあります。よく言われる「親知らず」が腫れたというのは、歯冠を取り囲んで、いわゆるポケットが形成され膿がたまった状態のことです。

このほかにも、歯並びを崩す原因になることもあり、今まで問題なかった歯並びが、20歳くらいになって、少しでこぼこしてきたと感じる人は、骨の中で「親知らず」が他の歯を押しして歯並びを乱している場合もあるのです。



さて、ここまでは「親知らず」を悪者のように書いてきましたが、実は、口の中の状態によっては、有効利用できるありがたい歯でもあるのです。

移植や矯正移動ができる場合も

虫歯などで歯を失った所に「親知らず」を植えて(移植して)生かすことや、近接する歯を失った場合では、移植ではなく、矯正治療によって「親知らず」を骨や歯ぐきの中から引っ張り出して、なくなった歯の位置に並べることによって咬む機能を回復させることもできるのです。

通常の矯正治療では、きれいな歯並びになった後の咬み合わせの安定を図るために、「親知らず」は悪さをしていなくても抜いてしまう場合が多いのですが、成人の方が矯正治療を始める場合、奥歯がすでに治療されていて歯の寿命に不安のあるケースも多く見られ、そのような時は、上記のように後々有効利用できる「親知らず」を残しておいたほうがよいと判断することもあります。

このように「親知らず」は、あるときは悪者、あるときは救世主となりうる大切な歯と言えるでしょう。

抜いた方がよいのかはかかりつけ歯科医に相談を

「親知らず」が生えている人も、いない人も、自分の「親知らず」の状態がどのようになっているのかを知っておくことも必要です。1度、かかりつけの歯科医に相談してみてもいいでしょうか。

きちんと生えている人も、特に上の「親知らず」は歯ブラシが届きにくく、虫歯になってしまうケースが多く見受けられます。いずれにせよ、歯磨きは念入りにしましょう。

詳しくはかかりつけ歯科医院でよくご相談下さい。



社団法人

柏歯科医師会

Http://www.kamukamu.or.jp

Email:kda@cc.rim.or.jp

